

氏 名	徐 裕 蘭 (Seo, Yuran)
学 位 の 種 類	博 士 (教育学)
学 位 記 番 号	甲 第 173 号
学 位 授 与 年 月 日	2013年6月28日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	Design and Implementation of a Process Model for Multinational E-learning in Higher Education: A Case Study of the ASEAN Cyber University Establishment Project (高等教育における多国間eラーニングのためのプロセス・モデルの設計と実行に関する研究—アセアン・サイバー大学設立プロジェクトの事例研究—)
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 鄭 仁 星 副 査 教 授 佐々木 輝 美 副 査 上級准教授 マーク W. ランガガー

論文内容の要約

eラーニングは一般的に開発途上国における教育の機会を広げ、国家発展と国際協力を促進させる手段として認識されている。これまでの先行研究によると、eラーニングの学習効果と効率性を促進させるため、多くの教授設計プロセスとモデルを検証し、研究を進めてきたことがわかるが、開発途上国の高等教育のための多国間eラーニング・システムを開発し、施行することに重点を置いたモデルはほとんど見当たらない。多国間eラーニング・システムを設計するためには多様な教育的ニーズ、各国のICTインフラのレベルの差異、そして、各参加国のeラーニング準備状況などが考慮されなければならない。同時に、各参加国の異なる考えや検討課題を調整し、協議する必要がある。

本論文は開発途上国のための多国間eラーニング・システムの設計と施行に応用可能なプロセスモデルを開発し、検証することを目標とした。そのモデルは以下の4つのステップを踏むことになる。すなわち、1) 目標を明らかにすること、2) 多国間eラー

ニング・システムに含まれる要因を特定するために議論を行うこと、3) 議論を経てまとめられた意見をモデルの開発に応用すること、そして4) 提案されたモデルを評価し改良することである。このようなステップを踏むことで、教育的・政策的指針を提示することができるであろう。多国間のeラーニング・システムを構築する過程は次に提示する内容になる。まず、多国間eラーニング・システムのための対象と目的を定め、多国的eラーニング・システムに含まれている主要要素を究明するための論題について協議を進めること。そして、モデルの開発に当たり、参加者達が合意した意見を適用し、提案されたモデルの評価・補完を行う手続きを明らかにすることである。このような多国間eラーニングのためのプロセスモデルを開発するにあたり、次の四つの研究課題が設定された。

- 1) 4つの参加国（カンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナム）の様々な環境要素とeラーニングのニーズを分析する。
- 2) アセアン地域の高等教育のための多国間eラーニング・システムを設計する。
- 3) 参加国の具体的な環境特性とニーズを反映する多国間eラーニング・システムとeラーニングコースを設計し開発する。
- 4) 開発途上国において持続可能な多国間eラーニング・システムを開発する実際的な方法とプロセスを提案する。

本論文は4つの参加国の多様な意見を反映し、参加国の希望やニーズを基にモデルを開発するための方法論としてアクションリサーチを導入した。そして本研究では、参加国、および参加大学の代表者からの直接的な意見を得ることができた。

多国間eラーニング・システム開発のための初期の五つの段階に基づいて、アセアン4ヶ国（カンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナム）が参加する多国間eラーニング・システムが開発・実施・検証された。最初の段階では目的とプロジェクト対象地域が決定され、参加国を対象にした妥当性調査を通して、eラーニングのニーズが分析された。その後、その調査結果を基に具体的な計画が作成され、すべての参加者達の同意の下、最終プロジェクト計画が決められた。この段階で、本研究の参加者である4つの参加国の代表で構成された共同運営委員会が、開発途上国が考える様々な意見を代弁する重要な役割を果たした。

第二段階において、多国間eラーニング・システムの開発計画は参加者の持続的な協議を通して進められた。参加国の環境やニーズが異なることから、各参加国のニーズを公正に総合し、最終案が合意に至るための十分な協議が行われた。第三段階では、第二段階で提案された計画にしたがって多国間eラーニング・システムが構築された。

第四段階では、参加国の中から選ばれた一つの大学において、そのシステムが実施・評価され、多国間 e ラーニングのためのプロセスモデルの効果が実証された。第五段階では、多国間 e ラーニング・システムに関連した多様な課題が参加者によって取り上げられ、それらの主な原因と解決策に関する論議が行われた。こうして、多国間 e ラーニング・システム開発のための初期の五つの段階モデルが入念に開発された。

モデルの開発と実施の過程において、多くの議論と交渉を経ることによって、多国間 e ラーニング・システムを開発するための具体的な手続きと方法が明らかにされたのである。結果的に、多国間 e ラーニング・システムの品質保証のために必要な 20 個の主要要素が提案され、それらは 3 つの領域、すなわち環境（政策決定、インフラストラクチャー、学習環境に関連する 10 個の要素）、教育（教授学習活動に関連する 6 個の要素）、そして、支援（技術的・個人的支援に関連する 4 個の要素）にまとめられた。

開発途上国の高等教育における多国間 e ラーニング・システムのためのモデルを開発し、検証することによって、本研究は開発途上国の異なるニーズと環境的多様性に適合した持続可能な多国間 e ラーニング・システムを設計し、施行することに焦点を当て、教授設計の新しいプロセスモデルを作成したことで、教授設計の知識基盤に寄与することができた。さらに、多国間 e ラーニングの事例研究として、プロジェクトを遂行する際に教授設計決定のための各段階を提示し、多国間 e ラーニング・システムにかかわる協議過程を概念化し、明示することができた。さらに、多国間 e ラーニング・システムを開発するに当たって、核心的な内容を説明するためのプロセスモデルの主要要素を明らかにしたのである。最終的に本研究は、提案されたプロセスモデルの効果、および交渉戦略の効果に関して、アクションリサーチに基づいた証拠を提示したのである。

アセアン 4ヶ国を対象にしたアセアン・サイバー大学設立プロジェクトの事例研究から、本研究はまた各意思決定を行う段階において、与えられた期間内に効果的な多国間 e ラーニングコースを開発したのである。同時に、多国間 e ラーニング・システムと e ラーニングコースを開発するための協議の争点を明示し、e ラーニングの開発、施行、そして、評価の段階で協議のメカニズム（例えば、運営委員会の会議開催など）を樹立することに寄与した。

このような寄与にも関わらず、本研究では、不安定なネットワーク接続、貧弱な ICT インフラストラクチャー、言語の壁、各参加大学の異なる学年歴、そして、参加者の e ラーニング不信など、多国間 e ラーニング・システムを施行するに当たっての限界が見られた。今後の研究では、このような課題や、学習者、教授者、そして、政策立案者達の心的態度を考慮し、多国間 e ラーニング・システムの学習効果を評価

する必要がある。同時に、本研究で提案したモデルを用いた多国間 e ラーニング・プロジェクトの効率的な使用を目指すために、このモデルは、より多くの大学、より多様な環境において、適用・検証される必要がある。

論文審査結果の要旨

徐 裕蘭氏の博士論文審査委員会は2013年5月28日、午前10時10分から11時20分まで、国際基督教大学教育研究棟の347号室にて口頭試問を実施した。提出された論文を入念に検討し、集中的な口頭試問を行い、そして審査委員間でも議論を行った。その結果、本委員会は徐 裕蘭氏によって提出された論文が、研究の焦点化、研究方法、得られた結果とそれに関する議論、そしてその構成において優れていることを認めた。さらに本審査委員会は、氏によって提出された論文が、アクションリサーチの手法に基づき、途上国における多国間eラーニング・システムの開発のためのインストラクショナル・デザインモデルを提示することで、eラーニングの領域において大きな貢献を行ったことを認め、全員一致で博士学位審査合格と判定した。

本研究において、徐氏は、インストラクショナル・デザインのプロセスモデルを開発し、そのモデルを多国間eラーニング・システムの開発と実施に応用し、eラーニングに関わった教員や学生とのインタビューを通してそのモデルの効果を検証し、さらに得られたデータに基づいてモデルの精緻化が行われた。とくに氏が提案したモデルは、途上国の多国間eラーニング・システムを開発するにあたって、eラーニングへの準備状況が異なる諸国の関係者が協働的にプロジェクトを進める上で、どのポイントで折り合いをつけるかについての交渉プロセスに焦点を当てていることにおいてオリジナリティーが認められる。

多国間におけるeラーニングのためのインストラクショナル・デザインモデルが過去の研究例において欠けていることに着目し、氏はその研究の必要性を示し、意味のある研究目的を明確にした。その目的を達成するために、アクションリサーチという最も適切な手法を用い、アセアン・サイバー大学設立プロジェクトという実際の多国間eラーニングにおいて、考案されたモデルの応用が行われた。

徐氏はこのプロジェクトのマネージャーであったため、多国間eラーニング・システムの開発と実施を間近に観察することができ、かつプロジェクト参加者と密に関わることもできたため、貴重なデータを集めることが可能であった。そのような貴重なデータを活用することができたため、さまざまな観点から成果を分析して議論を深めることができ、多国間eラーニングの研究者や開発者そして政策立案者に対し、学問的・実践的示唆を与えることが可能になったのである。

このように、多様なデータに恵まれた研究ではあったが、参加大学が少ないことやeラーニングプログラムの開発中における予期せぬアクシデントの影響、そして意思

決定における政治的な配慮等、限界が存在したことも否めない。しかしながら、これらの限界を差し引いても、本研究は、プロセスに焦点を当てたモデルを提示したという観点において、インストラクショナル・デザインや多国間教育の領域において、新たな知見を与えたといえる。提案されたモデルは、多国間 e ラーニング・システムの開発と実施に必要なステップと行動を具体的に示している点において優れている。したがって、このモデルは、多国間、多文化間、そして多大学間における e ラーニングの効果的・効率的デザインに関する今後の研究に対して、中核的な要因を示している点が高く評価される。さらに本モデルは、e ラーニングの実践家に対しても、途上国におけるより品質の高い e ラーニングプログラムの実現という観点から大いに役立つものである。

博士論文審査委員会は、徐 裕蘭氏の多大なる努力を認め、優れた論文の完成に心からの祝意を表すものである。